

「母の日」の由来

5月の第2日曜日は「母の日」。街の花屋さんにはカーネーションがズラリと並び、忘れがちな母親への感謝のきもちを思い出させてくれます。ちなみに、アメリカの「母の日」は祝日の1つで、1914年に制定されました。これには、「母の日」誕生のきっかけとなった、1人の女性が大きくかかわっています。

彼女の母親は早くに夫を亡くしますが、残された娘2人を苦勞しながらも見事に育てあげます。

1908年、女性は母親の恩を忘れないようにと、その命日に追悼式を開きます。その際、彼女は母親が好きだった白いカーネーションを捧げ、その日の参列者にも母のことを思いながら、一輪ずつ手渡していきました。それは、母親が愛した花を通して、母親のこと、また母親の愛の深さを知ってもらいたいと思ったからだといいます。

この追悼式はとても感動的なもので、多くの人たちの間で語られました。そして、ある百貨店経営者がこの話を耳にし、母に感謝をする日を設けるという主旨に賛同。自身のデパートで「母の日」のイベントを開催し、彼女の行いを世に中に広めていきます。このとき、彼女が出した提案が「母が活着ている人は赤いカーネーションを、母を亡くしている人は白いカーネーションを胸につける」というもので、これは形を変えながらも、現在の「母の日」まで受け継がれています。

母親を思う情熱は、彼女をさらなる行動へと駆り立てました。そして、有力な政治家に対して、手紙で「母に感謝する日を祝日にしてほしい」と訴え続けます。その思いは、ついに当時のウィルソン大統領にまで伝わり、大統領は「母の日」を祝日にする案を議会に提出。1914年にそれが正式に認められたというわけです。

すべての人は母親から命を授かるわけですから、誰もが母親に恩があるはず。そう考えると「母の日」が日本にも定着したのは、自然なことなのかもしれません。

「ほんでくれて あっがしう」

